

# 幼児の問題行動の発達的变化

## Developmental Changes in Problem Behavior during Childhood

西方 毅 細野一郎 濱野亜津子

Tsuyoshi NISHIKATA, Ichiro HOSONO, Atsuko HAMANO

### Abstract

When parents bring up their children, they are faced with many problem behaviors of the children. This study investigates the degrees of appearance of those problem behaviors. Those data will be useful for child care and education in preschool children.

Some interesting results are acquired. First, as to mild problem behaviors, boys show more than girls. As to severe problem behaviors, also boys show more. These mean that boys are more difficult to bring up than girls.

Second, mild problem behaviors show developmental change but severe problem behaviors do not. These suggest that some severe problem behaviors might be based on innate conditions or specific individual circumstances.

キーワード：問題行動、子ども、発達

Key Words：problem behavior, child, development

### 1. はじめに

子どもを育てる時にはさまざまな問題、トラブルに直面する。順調に何の問題もなく育つ子は少ないであろう。病気やけがをしたり、いじめやけんか、孤立などの社会関係の問題に出会ったり、悪い癖や行動など発達上の問題が現れたりなどさまざまである。こういった問題の中で、特に発達や家庭教育におけるさまざまな問題、それに伴う悩みはたいていの親が経験していると思われる。それらに対する多様な意見や対処法なども書店にあふれ、テレビなどで取り上げられている。

しかし、では、どのような問題がどの程度見られるか、どういった悩みが多く見られるかという点についてはその実態が明確ではないし、関連する統計も多くはない。個々の問題については各種の育児相談などでケースとして紹介されることはあっても、数値としてまとめたもの

は少ない。<sup>(1)</sup>

そこで、幼児期にどのような問題が現れるか、特に、親が子どものどのような行動や特性を「育児上、困ったこと」と捕らえているかを数量的に把握することを試みた。

こういった親の意識上の困った問題を把握することにより、保育における有用な参考資料が得られると共に、保育時の具体的な対応の方向や方法、家庭教育への示唆などが得られると思われる。

## 2. 研究方法

東京都内の幼稚園2園の保護者を対象とし、質問紙法により調査を行った。質問には、幼児期に見られやすい問題行動<sup>(2)</sup>を27項目取り挙げた。それぞれの項目について、親がどの程度困った問題ととらえているかを4段階（まったく困っていない、少し困っている、困っている、とても困っている）で評価してもらった<sup>(3)</sup>。調査対象の行動、特性は当該幼稚園に所属する幼児についてである。回収率はほぼ100%であった。

## 3. 結果

記入者は、母親が95.6%、父親が3.1%、その他1.3%であった。ほとんど母親が回答している。父親は、人数では11人にすぎないために独自に分析することができず、男女こみの全体として処理することにした。

対象となった幼児の年齢分布、男女比は以下の通りである。

表1 年齢分布

	男児	女児	合計
3歳	47	32	79
4歳	68	56	124
5歳	69	61	130
6歳	16	11	27
合計	200	160	360

この年齢分布を見ると、6歳児の人数が他の年齢グループよりも少なくなっており、結果の信頼性が低く、分析その他が困難である。そこで、3歳児と4歳児を合併し「年少児」、5歳と6歳児を合併し「年長児」の2群として分析することにした。<sup>(4)</sup>

表2 合併後の構成

	男児	女児	合計
年少児	115	88	203
年長児	85	72	157
合計	200	160	360

### (1) 全体の傾向：軽い問題行動

まず、今回取り上げた問題行動は全体としてどのくらい見られるであろうか。表3は、男児で「少し困っている」という回答を頻度の高い順にならべたものである。<sup>(5)</sup>

表に見られるように男児では、「すぐに『できない』と言う」、「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」、「わがままだ」などの行動が約半数近くの幼児に見られる。以下、「よく言い訳をする、他人のせいにする」、「物を大切にしない」、「すぐに先生や大人に頼る」と続く。

なお、男児では14項目で30%以上が「少し困っている」と回答しており、ほとんどの子ども何らかの問題行動を示していることになる。

一方、女児では一番多かったのが「よく言い訳をする、他人のせいにする」であり、次いで、「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」、「わがままだ」となっている。また、女児では14項目で25%以上の子どもに問題行動が見られる。

若干の順位の相違はあっても男児と女児では極めて似た傾向を示している。ただし、その割合では、男児と女児では差が見られた。

「すぐに『できない』という」、「わざといたずらして周囲を困らせる」、「文字への関心が薄い」という問題は男児に多く、女児との差は5%水準で有意であった。また、「すぐにかんしゃくを起こす。怒る」、「園の

決まりを守らない、順番を守れない」も男児に多く、1%水準で有意であった。逆に女児に多く見られる問題行動はなかった。

こういった行動は幼児には多く見られるものであり、程度が軽ければ、それほど大きな問題ではない。多くの母親は、「少し困っている」と回答はしているも、それほど困っているわけではないと思われる。

ただ、女児よりも男児の方で軽い問題行動の比率が全般に高い。また、5項目以上に「少し困っている」または「困っている」と回答した親が、男児では68.5%であるのに対して、女児では、この回答比率が54.4%であった（1%水準で有意）。これらの結果は、「女の子は育てやすい」という一般に言われる言葉を裏付

表3 軽い問題行動

項 目	男子	女子
すぐに「できない」と言う	50.5%	39.4%
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	47.0%	44.4%
わがままだ	45.0%	43.8%
よく言い訳をする、他人のせいにする	44.0%	45.6%
物を大切にしない	44.0%	37.5%
すぐに先生や大人に頼る	43.5%	37.5%
落ち着きがない	41.0%	31.3%
言葉遣いが悪い	39.5%	31.9%
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	37.5%	24.4%
飽きっぽい	36.5%	36.3%
自分勝手、他の子のものを横取りする	32.5%	26.3%
自分のことが自分でできない	31.0%	26.9%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	30.5%	26.3%
他の子と遊べない・孤立する	30.0%	24.4%
先生や大人に反抗が激しい	28.0%	24.4%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	28.0%	29.4%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	26.0%	25.0%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	26.0%	18.8%
わざといたずらをして周囲を困らせる	25.5%	15.0%
文字への関心が薄い	24.5%	15.0%
汚れることをいやがる	21.5%	18.8%
よくうそをつく	20.5%	20.0%
園の決まりを守らない、順番を守れない	18.0%	4.4%
他の子をいじめる	13.0%	7.5%
幼稚園に喜んで行きたがらない	12.5%	9.4%
言葉の発達が遅れている	12.0%	7.5%
外遊びをしたがらない、嫌がる	4.0%	1.9%

ける結果となっている。

## (2) 全体の傾向：重い問題行動

次に、「困っている」あるいは「とても困っている」と回答したものを見てみよう。表4は、上記2段階の合計の全体に対する割合である。なお、この2段階のどちらでもなかったものは表にはあげていない。

男児で上記2段階合計が男児全体の10%<sup>6)</sup>を超えたのは、「落ち着きがない」、「けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く」、「すぐには『できない』という」、「すぐにかんしゃくを起こす。怒る」、「自分のことが自分でできない」、「わがまままだ」、「物を大切にしない」、「自己主張ができない」、「言いたいことが言えない」、「言葉遣いが悪い」という9項目であった。一方女児で、10%を超えたものは、「すぐにかんしゃくを起こす。怒る」、「けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く」、「わがまままだ」、「物を大切にしない」の4項目しかなかった。

男女間で統計的に有意な差が見られるのは、「落ち着きがない」と「自分のことが自分でできない」（いずれも男児の方の割合が高く、1%水準で有意）の2項目だけである。しかし、他の項目でも、統計的に有意ではなくとも、全般に男児の問題行動の発生割合が高くなっている。この結果からも、母親が男児の世話やしつけに手を焼き、育てにくさを感じていることが示されている。

表4 重い問題行動

項 目	男子	女子
落ち着きがない	16.0%	6.3%
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	15.0%	11.3%
すぐに「できない」と言う	13.5%	8.1%
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	13.0%	12.5%
自分のことが自分でできない	12.5%	1.9%
わがまままだ	12.0%	10.6%
物を大切にしない	12.0%	10.6%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	11.0%	6.9%
言葉遣いが悪い	10.0%	3.8%
すぐに先生や大人に頼る	9.0%	3.8%
文字への関心が薄い	9.0%	3.8%
飽きっぽい	8.5%	4.4%
よく言い訳をする、他人のせいにする	8.5%	4.4%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	6.5%	1.3%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	6.5%	3.8%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	6.0%	0.6%
言葉の発達が遅れている	6.0%	0.6%
自分勝手、他の子のものを横取りする	5.0%	0.6%
他の子と遊べない・孤立する	4.5%	1.3%
先生や大人に反抗が激しい	4.5%	1.9%
わざといたづらをして周囲を困らせる	4.5%	2.5%
汚れることをいやがる	4.5%	3.1%
幼稚園に喜んで行きたがらない	4.0%	1.9%
園の決まりを守らない、順番を守れない	3.0%	0.6%
よくうそをつく	2.5%	2.5%
他の子をいじめる	1.5%	0.0%
外遊びをしたがらない、嫌がる	0.0%	0.0%

なお、「落ち着きがない」については、男児の活動水準が一般に女児よりも高いということに原因があると考えられる。運動能力も男児の方が高く、また、スポーツや競争などを男児は好む傾向がある。こういった点が、母親には「落ち着きがない」ととらえられるのであろう。その意味では、このアンケートの「落ち着きがない」という問題行動は、多動性症候群のような病的な落ち着きのなさというよりも、母親の希望や期待よりも活発すぎるために「困った問題」ととらえられている可能性がある。

また、「自分のことが自分でできない」については、日本独自の性差に対応するしつけの影響も考えられる。谷田貝らの調査（谷田貝他，1988）でも、親は女児には特に身の回りの世話のしつけを丁寧に行う傾向が指摘されている。とすると、そういったしつけが十分になされていない男児で、「自分のことが自分でできない」傾向が女児よりも高くても当然であるかも知れない。

### （3） 発達の相違・軽い問題行動

次に、年少児、年長児間で問題行動の相違について検討する。男児と女児では問題とされる内容および程度に相違があるために別々に比較する。

表5は、男児において「少し困っている問題」についての回答合計をまとめたものである。回答率で、有意差が見られたのは、「言葉遣いが悪い」（年少＜年長、5%水準以上）のみであった。他の項目では有意差は見られなかった。有意ではないが、年少児・年長児間の差が10%前後<sup>(7)</sup>あったものを挙げると、年少＞年長となっているもの

表5 軽い問題行動・男児

項 目	年少	年長
すぐに「できない」と言う	53.0%	47.1%
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	52.2%	40.0%
わがままで	45.2%	44.7%
すぐに先生や大人に頼る	44.3%	42.4%
落ち着きがない	43.5%	37.6%
物を大切にしない	41.7%	47.1%
よく言い訳をする、他人のせいにする	40.9%	48.2%
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	38.3%	36.5%
自分勝手、他の子のを横取りする	36.5%	27.1%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	34.8%	24.7%
飽きっぽい	34.8%	38.8%
自分のことが自分でできない	33.9%	27.1%
他の子と遊べない・孤立する	33.0%	25.9%
言葉遣いが悪い	32.2%	49.4%
先生や大人に反抗が激しい	29.6%	25.9%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	27.8%	23.5%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	25.2%	31.8%
文字への関心が薄い	25.2%	23.5%
汚れることをいやがる	24.3%	17.6%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	23.5%	29.4%
園の決まりを守らない、順番を守れない	23.5%	10.6%
わざといたづらをして周囲を困らせる	23.5%	28.2%
よくうそをつく	18.3%	23.5%
幼稚園に喜んで行きたがらない	14.8%	9.4%
言葉の発達が遅れている	12.2%	11.8%
他の子をいじめる	10.4%	16.5%
外遊びをしたがらない、嫌がる	5.2%	2.4%

は、「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」、「自分勝手、他の子のものを横取りする」、「親離れが悪く、親と不安がる」、「園のきまりを守らない、順番を守れない」などとなる。

一方、年少＜年長となっているものは、「言葉遣いが悪い」のみであった。

以上の結果から、男児においては、年齢と共に言葉遣いが悪くなるが、それを除けば、全体としては問題行動が減少していくと推測される。しかし、10%前後の差は偶然である可能性も高いわけで、より慎重に検討する必要がある。

次に女児であるが、女児の場合、有意差のある項目はなかった。男児の場合と同様に、10%前後差のついたものを挙げると、年少＞年長となるものが、「自分勝手、他の子のものを横取りする」、「すぐにかんしゃくをおこす」の2項目であった。逆に、年長＞年少となるものは、「言葉遣いが悪い」、「よくうそをつく」であった。

「言葉遣いが悪い」という項目については、年少児よりも年長で割合が高いことが示されているが、女児でも同様の傾向を示しており、極めて興味深い。また、女児においては、男児ほど年長での問題行動が減少しないように思われる。この点は後により詳細に検討する。

表6 軽い問題行動・女児

項 目	年少	年長
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	47.7%	41.7%
わがまま	45.3%	43.1%
よく言い訳をする、他人のせいにする	43.0%	50.0%
すぐに「できない」と言う	40.7%	38.9%
すぐに先生や大人に頼る	39.5%	36.1%
物を大切にしない	37.2%	38.9%
飽きっぽい	33.7%	40.3%
自分勝手、他の子のものを横取りする	31.4%	20.8%
落ち着きがない	30.2%	31.9%
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	29.1%	19.4%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	29.1%	30.6%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	27.9%	20.8%
先生や大人に反抗が激しい	27.9%	20.8%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	27.9%	25.0%
自分のことが自分でできない	27.9%	25.0%
言葉遣いが悪い	27.9%	36.1%
他の子と遊べない・孤立する	26.7%	20.8%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	18.6%	19.4%
汚れることをいやがる	18.6%	19.4%
文字への関心が薄い	18.6%	11.1%
よくうそをつく	16.3%	25.0%
わざといたづらをして周囲を困らせる	15.1%	15.3%
幼稚園に喜んで行きたがらない	9.3%	9.7%
言葉の発達が遅れている	9.3%	5.6%
他の子をいじめる	5.8%	8.3%
園の決まりを守らない、順番を守れない	4.7%	4.2%
外遊びをしたがらない、嫌がる	1.2%	2.8%

#### (4) 発達的な相違：重い問題行動

表7は、年少男児・年長男児に見られる、「困っている」、「とても困っている」回答をまとめたものである。年少男児で、回答率が年少男児全体の10%を超えた項目は、「すぐにかんしゃくを起こす」、「自分のことが自分でできない」、「すぐに『できない』と言う」、「わがままだ」、「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」、「落ち着きがない」、「文字への関心が薄い」など、7項目であった。

同様に、年長男児の回答率が10%を超えたものの比率を高い順に並べると、「落ち着きがない」、「けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く」、「物を大切にしない」、「言葉遣いが悪い」、「すぐに『できない』と言う」、「自己主張ができない、言いたいことが言えない」、「よく言い訳をする、他人のせいにする」、テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない」、「すぐ先生や大人に頼る」の9項目となっている。

ここでも、年少と年長間では回答率の相違に有意差が見られなかった。軽い問題行動の場合と同じように、5%前後の差<sup>(8)</sup>のえられる項目を挙げると、年少>年長となるものが、「すぐにかんしゃくを起こす」、「自分のことが自分でできない」、「文字への関心が薄い」などであった。

逆に年少<年長であるものは、「落ち着きがない」、「物を大切にしない」、「言葉遣いが悪い」、「良く言い訳をする、他人のせいにする」、「テレビばかり見ていて他のことをあまりしない」などである。

表7 重い問題行動・男児

項 目	年少	年長
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	15.7%	9.4%
自分のことが自分でできない	14.8%	9.4%
すぐに「できない」と言う	13.9%	12.9%
わがままだ	13.9%	9.4%
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	13.0%	17.6%
落ち着きがない	12.2%	21.2%
文字への関心が薄い	11.3%	5.9%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	9.6%	12.9%
物を大切にしない	9.6%	15.3%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	8.7%	3.5%
すぐに先生や大人に頼る	7.8%	10.6%
飽きっぽい	7.8%	9.4%
言葉の発達が遅れている	7.8%	3.5%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	7.0%	4.7%
自分勝手、他の子のものを横取りする	7.0%	2.4%
言葉遣いが悪い	7.0%	14.1%
他の子と遊べない・孤立する	6.1%	2.4%
わざといたづらをして周囲を困らせる	6.1%	2.4%
幼稚園に喜んで行きたがらない	6.1%	1.2%
よく言い訳をする、他人のせいにする	6.1%	11.8%
先生や大人に反抗が激しい	5.2%	3.5%
汚れることをいやがる	5.2%	3.5%
園の決まりを守らない、順番を守れない	3.5%	2.4%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	3.5%	10.6%
よくうそをつく	3.5%	1.2%
他の子をいじめる	1.7%	1.2%
外遊びをしたがらない、嫌がる	0.0%	0.0%

表8は、重い問題行動について女兒の回答をまとめたものである。年少女兒で10%を超えた項目は、「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」、「わがままだ」、「すぐにかんしゃくを起こす、怒る」の3項目であり、同様に年長女兒では、「すぐにかんしゃくを起こす、怒る」、「物を大切にしない」の2項目となっている。年少女兒、年長女兒共に、男兒より回答の比率が低くなっている。

また、年少・年長間で5%以上の差のついたものは、年少>年長の「すぐ先生や大人に頼る」と、年少<年長の「自己主張ができない、言いたいことが言えない」の2項目のみであった。

表8 重い問題行動・女兒

項 目	年少	年長
けんかしたり、叱られたりするとすぐに泣く	12.8%	8.3%
わがままだ	11.6%	8.3%
すぐにかんしゃくを起こす。怒る	10.5%	13.9%
物を大切にしない	9.3%	11.1%
すぐに「できない」と言う	7.0%	8.3%
落ち着きがない	5.8%	6.9%
すぐに先生や大人に頼る	5.8%	0.0%
親離れが悪く、親と離れると不安がる	4.7%	2.8%
汚れることをいやがる	4.7%	1.4%
よく言い訳をする、他人のせいにする	4.7%	2.8%
自己主張ができない、言いたいことが言えない	4.7%	9.7%
言葉遣いが悪い	4.7%	2.8%
文字への関心が薄い	4.7%	2.8%
わざといたずらをして周囲を困らせる	2.3%	1.4%
幼稚園に喜んで行きたがらない	2.3%	1.4%
飽きっぽい	2.3%	5.6%
自分のことが自分でできない	2.3%	0.0%
先生や大人に反抗が激しい	1.2%	1.4%
テレビばかり見ていて、他のことをあまりしない	1.2%	1.4%
他の子と遊べない・孤立する	0.0%	2.8%
よく他の子とけんかする、けんかが多い	0.0%	1.4%
自分勝手、他の子のものを横取りする	0.0%	0.0%
園の決まりを守らない、順番を守れない	0.0%	0.0%
他の子をいじめる	0.0%	0.0%
外遊びをしたがらない、嫌がる	0.0%	0.0%
よくうそをつく	0.0%	4.2%
言葉の発達が遅れている	0.0%	1.4%

#### 4. 全体の要約と考察

問題行動がどのくらい見られるかについて全体的な傾向を見ると、「軽い問題」については、男兒の30%以上に見られるものが14項目、女兒の25%以上に見られるものが14項目あった。これらの数字は、まったく問題がない幼児は少なく、ほとんどの親が子どもの行動に何らかの問題を感じていることを示している。

しかし、これらの項目を良く眺めてみると、「すぐに『できない』と言う」、「わがままだ」など、子ども一般に広く見られる現象であるわけで、軽い問題行動の水準では、特に教育的な配慮を必要とするとは思われない。親の育児における不満が、いわば「愚痴」となって現れた程度であると解釈するのが妥当なところではなかろうか。



軽い問題行動について男子全体と女子全体を比較すると、全般に男子の方が問題行動を示す比率が高くなっている。特に、「すぐに『できない』という」、「わざといたずらして周囲を困らせる」、「文字への関心が薄い」、「すぐにかんしゃくを起こす。怒る」、「園の決まりを守らない、順番を守れない」などにおいては明確な相違が現れている。これらの項目からは、男児は「いたずらで、わがままで、反抗的で、怒りっぽい」という印象を受ける。これは、「女の子は育てやすい」と言う一般的に言われる育児観と軌を一にするものである。

では、なぜこのような差が現れるのであろうか。その理由としては、男児が女児よりも活動水準が高いこと、自立心が高いこと、争いを好むことなどの特性が挙げられる。そうであるならば、こういった問題は生理学的な基盤に基づくものであり、家庭環境や育児の不十分さに基づくものではないということになる。

「重い問題行動」は、男児では9つの項目で10%以上、女児では4つの項目で10%以上見られると言う結果になっている。この割合は、幼稚園のどのクラスにも、数人は、親が悩むような問題行動を示す幼児がいることを意味する。

男児では、「落ち着きがない」が16%で最も高く、以下、「軽い問題行動」と類似した順で並んでいる。この軽重両結果の比較から、今回得られた問題行動の順位の信頼性が高いことが分かる。女児では、「すぐにかんしゃくを起こす」項目の回答率が13%弱で最も頻度が高く、その次の項目からは「軽い問題行動」と類似した順になっている。このことも男児の結果と対応する。

ところで、男児、女児共にほとんどの項目で、「重い問題行動」の比率は「軽い問題行動」の三分の一から四分の一以下であるのに対して、女児の、「すぐにかんしゃくを起こす、怒る」項目では、「軽い問題行動」が24%、「重い問題行動」が13%、であり差が小さく、全体の結果と一致していない。なぜ、このような結果になったかについては不明であるが、女児特有の問題行動として、何か心理的、社会的理由があるのかも知れない。この点はさらに他の調査で検討してみたい。

次に、発達的な変化であるが、男児では、言葉遣いが悪くなる傾向を除けば、年齢が上がるにつれ軽い問題行動は減少するように思われる。ただし、あまり変化のないもの、むしろ比率が若干高くなるものなどもあり一様ではない。このような結果が得られた原因については、その背景にある構造の分析など詳細な検討が必要であろう。この点は次回報告する予定である。

年長になると言葉遣いが悪くなる傾向は男女共に同じであり、明確な現象と言えよう。このことは、言葉の発達の点からも納得がいく。年齢と共に獲得語彙が増え、多様な表現が可能になっていく。幼稚園・保育所の子どもたちの言葉、テレビのアニメに出てくる言葉なども、子どもたちは学習し使うようになっていく。今まで、いわば「親子の間の会話言葉」しか使わなかった子どもが、世間で使われている乱暴な言葉を使うようになるのである。それが親にとっては、「言葉遣いが悪くなった」と捉えられるのであろう。これは、言葉のしつけの面では困ったことではあっても、言語発達、社会性発達の面では必然的なものであると言える。

重い問題行動については、10%以上の子どもに見られるものは、年少男児で7項目、年長男児で9項目であった。回答の比率では、年少児と年長児間で差が見られなかった。また、比率の大小も両群間で一貫していなかった。また、年少女児では、10%を超える項目は年少女児で3項目、年長女児で2項目であった。

上で見たように重い問題行動には発達的な一貫した傾向は見られなかった訳だが、このことは、重い問題行動が発達的な問題ではなく、生得的・後天的・状況的な問題であることを意味しているように思われる。たとえば、男児における「けんかしたり叱られたりするとすぐに泣く」行動や、女児における「すぐにかんしゃくを起こす、怒る」、有意ではないとはいえ、年少児よりも年長児の割合が高くなっている。この行動は、幼い故に感情統制が十分にできないという場合もあるであろうが、その子ども特有の性格傾向がある場合もあり、また、家庭環境の影響があるのかも知れない。この点もより詳細に検討する必要があるであろう。

問題行動と一口に言っても、その問題の程度、範囲は多様である。今回の調査では、問題行動の軽重や程度で男児、女児間に相違があること、問題行動の軽重に、発達的な相違の見られるもの、生得的・環境的影響により発達的な変化の少ないものなどのあることが明らかになったと言えよう。これらの点については、今後さらに詳細に検討していきたい。

## 【注】

- (1) 精神遅滞や発達障害などの発生率などについての統計は存在する（たとえば、「発達障害白書 2008年版」など）。しかし、わがままやいじわるなど、日常生活における一般的な困った行動については、まとまったものはほとんど見かけない。
- (2) この論文では、「問題行動」を、育児上、保育上、対応に困る行動に限定する。精神遅滞や発達障害は含まないものとする。この調査で取り上げた問題行動の選定においては、先の障害白書や他の論文（菅原ますみ 2001）などを参考にした。なお、質問紙の中には精神遅滞や発達障害を含まないことが明記されていないために、回答の中にそういった障害児の回答も含まれる可能性がある。ただし、調査協力園の話では、発達障害児と思われる幼児はほとんどいないとのことであった。
- (3) 問題行動の評定として4段階尺度を用いたのは、今後、多変量解析により問題行動の潜在的な要因、構造を検討することを予定しているためである。
- (4) 年齢のカテゴリーをどのようにとるかは微妙な問題である。細かく分けすぎると発達的な傾向が明瞭にならない場合もあり得る。今回の場合も、このように大きく分けたにも関わらず発達的な差はそれほど顕著ではなかった。もし、多くの項目で大きな発達差が見られるのであれば、さらに資料数を増やして細かい年齢段階に分け、発達の変化の詳細な分析が必要になるであろう。
- (5) 問題行動のカテゴリーとして「軽い」、「重い」と言う2分類を用いた。「軽い」というカテゴリーに属するのは、「少し困った問題」のみであり、親が時にいらいらする程度の問題である。「重い」というカテゴリーに属するものは、「困った問題」、「とても困った問題」など、親が、いわば「手を焼く」、あるいは、「悩んでしまう」行動とする。小学校から中学校などで見られる、反社会的あるいは非社会的行動などの深刻な問題行動と言った意味合いではない。
- (6) 10%と言う数字に心理統計学的な意味はない。ただ、10%と言うことは10人に一人ということであり、1クラスあたり何人、1つの園あたり何人くらいに問題が見られると言う目安として利用できる。

- (7) この項目の資料数の場合、資料間の比率の差が10%程度になる確率は0.1～0.2くらいである。  
帰無仮説を棄却はできないが考察の参考として取り上げた。
- (8) この項目の資料数の場合、資料間の比率の差が5%程度になる確率は、上記同様0.1～0.2位である。

# 【参考文献】

- 谷田貝公昭、村越晃他 1988 「現代の子どものしつけにおける性差の調査」 日本保育学会第41回大会 広島大学
- 日本発達障害福祉連盟編 2008 「発達障害白書2008年版」 日本文化科学社
- 菅原ますみ 2001 「こども問題行動はどうやって発達していくのか：生後15年間の追跡研究から」 『科学』 岩波書店 vol. 71 694-698

**要約：**

子どもを育てる時にはさまざまな問題、トラブルに直面する。この研究では、幼児期にそういった問題がどの程度現れるか、特に、親が子どものどのような行動や特性を「育児上、困ったこと」と捕らえているかを数量的に把握することを試みた。そういった問題行動を数量的に把握することにより、保育や家庭教育における有用な参考資料が得られると思われる。調査結果から以下のように点が明らかになった。「軽い問題」については、男児の30%以上に見られる問題行動が14項目、女児の25%以上に見られる問題行動が14項目あった。男子全体と女子全体を比較すると、全般に男子の方が問題行動を示す比率が高くなっている。また、「重い問題行動」については、男児では9つの項目で10%以上、女児ででは4つの項目で10%以上見られると言う結果になっている。発達的な変化については、「軽い問題行動」で減少する傾向が見られる。これは、子どもが社会的に成熟するために減少するものと考えられる。一方、「重い問題行動」では問題行動の内容によって減少するもの、増加するものなどまちまちであり、一概に言えないことが明らかになった。生得的・環境的な何らかの要因が推測される。